

# 所 報

No.22  
佐賀県教育センター

佐賀県佐賀郡大和町川上西山

(TEL 09526-2-5211)

## も く じ

|                                            |     |
|--------------------------------------------|-----|
| ○この1年目を省みて(教育センター 所長 杠 茂)                  | 1   |
| ○公開講座・講演要旨「学習意欲を高めるために」<br>(筑波大学助教授 松原 達哉) | 2～5 |
| ○昭和54年度 研修講座をふりかえって                        | 6   |
| ○教育相談 — 現状と課題 —                            | 7   |
| ○昭和54年度 研究紀要の紹介                            | 8～9 |
| ○長期研修の制度と54年度研修生の感想                        | 10  |
| ○公募・教育実践・研究記録の紹介                           | 11  |
| ○教育専門図書館をめざして — 教育資料室の紹介 —                 | 12  |

## 佐賀県教育センターの一年目を省みて

佐賀県教育センター所長 杠 茂



これからの本県教育の在り方を求めて静かに思索を深め、来年度の計画に目を輝かせている所員を前にしながら、竣工前の突貫工事の中で移転業務にてんてこまいしていた去年のことを思い浮べるとき、まだ1年もたっていないというのに、それが遠い出来事のように思えてきます。このような落ちつきと充実感を得ておりますことは、ひとえに関係各方面からの御指導と御援助のお陰だとひたすら感謝しております。

間もなく2年目を迎えることになりますが、最も有難いことは総合教育センター構想に基づく2期工事の第1段として、理科教育センター統合の設計委託料が当初予算に計上されたことです。このことは、情報処理教育棟や技術家庭、芸術等の整備、検討の事務にも弾みをつけるものと期待しています。

ところで、研修について思うことですが、「自ら学ぶ者こそよく教え導くことができる」「子どもの学ぶ喜びは、教師の教える工夫から」という道理や「教育公務員の研修は、職務遂行上の不可欠要素であり、本人の積極的意志が尊重され、かつ研修についての責任が課せられている事実」、これらを否定する人はいません。だが往々にして公の機関が開催する職務研修では、内容に入る前に受け方や受けさせ方のところでこじれてしまい、

そのため研修の機会をなくす人があるということです。

教師は人さまの子を責任をもって善い人に育てるために在るものと心得て今日に及んだ私ですが、最近、「師道を興さんとならば、<sup>わが</sup>妄に人の師となるべからず、又妄に人を師とすべからず。必ず教ゆべきことありて師となり、真に学ぶべきことありて師とすべし」との吉田松陰のことばを思うとき、この年になって教師として生きることの難しさに感じ入っているところです。

かつて、終戦直後の私たち教師は「新しい日本を……として建て直すことは日本の教育者自身が進んで果すべき務である」との指針に力を得、先ずは自らを変革するため、異常なまで研修意欲を燃やしたものでした。

これからますます厳しくなる国際社会の動向の中で教職を貫くためには、教え子のよりよき明日を望んで能力を開発するため謙虚に教えを乞い、学び合い、自らを信じて乗り越えることしかないと考えます。これが教師のもつ宿命であり、教師の研修ではないでしょうか。

第2年度に向う私たちは、研修事業を充実するために学校と十分連絡を密にして、頼りになる、役に立つ教育センターの実現を目指して一層の努力をしたいと考えています。



は知って利用する必要があります。私は、こういう人間の欲望をうまく利用して指導するといった一つの例として、宿題のさせ方について考えてみたいと思います。たとえば、ここまで授業が終わったとしますと、授業の終わりに一分か二分余りして、あと一、二分あるからその間、宿題に予定しているもののうちの二題か三題をやらせておくわけです。すると何となく成就の欲求が満たされないのでは不愉快です。いわゆる頭の中が未完で残るわけです。宿題あとわずかだということで家へ帰るとすぐやってしまうということです。筑波大の卒論で、このことをとり上げた人がいましたが、やはり少しやらせておいた方が、成績、意欲が上がったという結果が出ているわけで、宿題の出し方一つで、子どもの学習意欲も変わってくるものです。

もう一つ、「二枚の答案」というのは、成就の欲を満足させる一つの方法として、試験をやる時に二枚の答案を刷って、たまには同じテストを二回やることもあると話しておいて、一回目の答案をきちんと見るように言って返すわけです。もちろん正答を示し、指導して返すわけです。到達目標に達すればいいわけですから、次の日に同じテストをして、家で復習をした子どもは100点とれるわけです。がんばればとれるということは完全学習であるし、成功欲も満たすことになります。

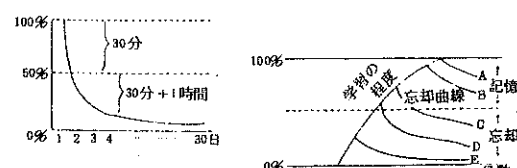
#### ④ すぐ復習・すぐ宿題の習慣をつける。

……………忘却の理論

この習慣は、小学一年生からつけることが望ましい。勉強する場合、子どもは物事をどういう具合にして忘れていくか、たとえば、Ebbinghausという人の忘却曲線によると、その日のうちに復習をすれば、完全に憶えるのに30分ぐらいですむのですが、一週間も経ってやりますと、忘れたことを思い出すのに30～60分位要します。そのうえ、宿題そのものをやる時間が加わりますから1時間半もかかることになり、その日にやるのと比べれば、2～3倍必要になるわけです。成績がよくなるのは机に向かっている時間の長短ではなく、勉強のコツや技術にある。家に帰って、すぐに、さっとやっちゃえば、成功感・充実感もわき、意欲もおきてくるわけです。そして余分の時間はスポーツや遊びを友人としてたりして他の方にエネルギーを費せばよい。

さらに、学習の程度と忘却ということにつ

いて、Gatesという人の研究があります。それによると、復習を100%確実にした場合には、日がたっても記憶しているが、70～80



忘却の過程  
(Ebbinghausによる)

%になると、このように忘れていくということです。

#### ⑤ 集中学習より分散学習を。

三時間、ぶっ続けて勉強した場合と一時間ごとに休憩時間をとって休憩する(分散法)のと、どちらが効果があるかという、一般に分散学習が効果があります。これは人によっても違うが、内向性の人、高学力の人、好きな教科をする場合などは集中法でもよい。分散学習は一般に、低学年、低年齢の子ども、外向性の人、低学力の人に適していると言えます。20分したら休むとか、嫌いな教科や年齢によって、集中できる時間の違いを考える必要があるわけです。したがって、一年生と六年生と授業時間が同じであることには問題があります。記憶学習やスポーツ、単純な計算など緊張(集中)と休憩をおりまぜると効果が上がります。クレペリン検査などでもこのことは明らかにわかるでしょう。

継続は力なりと言いますが、日記を毎日続けて書かせるのもよい。書くことは脳を刺激するし思考力を練る。集中力もいるし、表現能力・創造性を養うことにもなります。小さい時から手伝いなど簡単なことを継続してやる習慣をもつことは大切なことです。

#### ⑥ 不明なところを明らかにしておく習慣を。

小さい時から、わからないことは、その日のうちに明らかにしておく習慣です。自分で考える、友だちに聞く、図書館で調べる、先生にたずねるなどの習慣づけが大切でしょう。

#### ⑦ 子どもの質問の受け方の工夫を。

質問できる雰囲気、機会を作り、質問ノートなどを書かせて答えてやるような工夫が必要です。

#### ⑧ 学習環境の整備。

学習のための部屋は、必要なものを身近に

揃えておき、そうでないものはできる限りおかない方がよい。それは集中力を欠く原因になります。教室でも、勉強部屋でも、簡素にしてとくに前面には何もないのが望ましいと思います。

#### ⑨ できない子は、得意科目に力を入れる。

平均して、できのよくない子は、たとえば、体育が得意だとか、比較的国語がよくできるとかというような場合、一般に成績の低い人は、こういうもので自信とか優越感をつけて学校を楽しくしないといけない。学校へ行ってもなんにもとりえない人は、学校に来るのがいやになります。だから国語で自信をもたせるとか、これに力を入れる。何もない子もいるかも知れないが、人間には何か能力があるはず。いくら個人差はあってもそれぞれもっています。その中でも「子どもの能力」として、一つは、知的能力といって知能・学力があげられます。また、人間には社会生活能力というものもある、クラスのリーダーになったり、クラブ活動、生徒会の中心になったり人のために奉仕的によく頑張る世話好きな人です。そういう友達の多い社会生活能力の豊かな子もいます。創造性といってこれからの社会で非常に大切な能力もある。創造性というのは、別にエジソンや湯川博士のように発明・発見する能力ではありません。これは思考の速さ、広さ、深さ、ユニークさです。問題を解決する、考えて解く力を創造性といって、能力の一つでもあります。ものを考えるときに、早くいろんなことを考えつく、これには、理科・社会・英語・数学でも問題を解決する場合どうしたらよいかという考えが浮かぶことが必要です。もっと身近なものであれば、迷い子になった場合どうするかということだって問題解決になる。あるいは、21世紀には地球の資源がなくなってきました。そうした場合、人間はどう生きるのびていくか、そういう場合の廃物利用の仕方、新聞紙の使い方、新聞紙をどう使ったら人間の生活に役立つか考えつくなどというのは、学力がなくても案外学力の低い人の方が気がつく子があります。思考の速さとは早く気づく、考えつく、広さはいく種類も考えつく、深さとは、やく立つ、有効なことを考えつく、ユニークさとは、だれも気がつかないことに気がつくまで、ユニークな考えを持てないでいます。これを偏差値人間と呼びますが、これがふえて、困ったときに自ら対処できず、人に頼る人間が

きて、ユニークな考えを持てないでいます。とくに、教育をうけた大人が、公式の枠から出ず、創造性がためになってきています。これを偏差値人間と呼びますが、これがふえて、困ったときに自ら対処できず、人に頼る人間が増えていることは重視しなければなりません。人間に大事なものはいろんな能力を発見していくことです。増えていることは重視しなければなりません。人間に大事なものはいろんな能力を発見していくことです。

子どもの能力には、この他に特殊才能、運動能力・体力、さらに職業適性があります。子どもを見る場合、これからの21世紀にとって大事なものは、社会生活能力、創造性、特殊才能、運動能力・体力です。今大学に会社からこんな人がほしいと言ってくるのは、第1番目にバイタリティーのある人、言いかえると意欲・活力のある人、2番目に創造性のある人、なにか人と変わっている人、ユニークなことを考える人を求め、その次に健康な人、そして4番目に明るい人、対人関係のいい人、5番目に学力がいい人という順序です。だから一人の子どもを見る場合いろんな角度からこの子にはどういう長所・短所があるかをみて、長所をのばしてやるようにしてほしい。

#### ⑩ ノートのとり方、答案の書き方の工夫。

こういうものも、常に指導しておくことです。ノートなどわかりやすくきちんと書くということ、時々教師は、生徒のノートをみて、きちんとわかりやすく書いているか見てやる必要があります。答案一つ書く場合にもじょうず、へたがあるので、能力を存分に発揮できるようなノート・答案の書き方について指導する必要があります。

#### ⑪ 趣味・特技をもち、自信をもたせる。

人間だれでもなにか人よりすぐれたものがあると自信をもてるものです。そしてある面ですぐれていると他の面も負けてはいやだと意欲がわいて来る。こういう意味で特技・趣味をもつことが必要です。

もし勉強したのに成績が低下したら生き甲斐をなくす。そんな時に、特技・趣味を生かす場としてのクラブ活動を大いに活発にさせ全員参加させるような場があると、学習意欲もわいて来ます。ある教科ができると他の教科にも自信がわいて来ます。このような現象を心理学では転移といいます。勉強が転移するよう心がけてほしいものです。

## 昭和54年度 研修講座をふりかえって

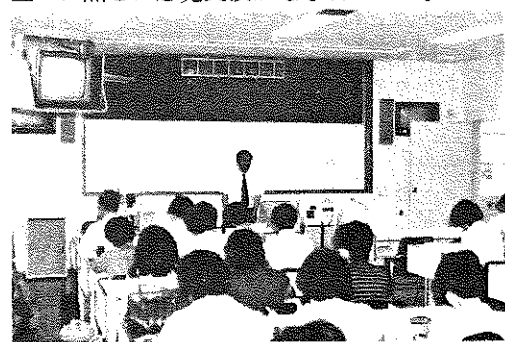
昭和54年度の研修講座から

本年度の研修講座は幼稚園・特殊教育諸学校から高等学校までの60講座が開催され、講座延日数208日間に1626名の先生方が参加された。

これらの研修講座は先生方に、それぞれの専門的な研修をして頂くだけではなく、教職に携わっている者同士が起居寝食を共にする生活の中で、好ましい人間関係をつくりあげ、教職員としての資質・能力の向上を目的としたものであるだけに、どの講座においても受講者は和気あいあいのうちにも熱心であり、真剣であった。

大学教授の講義、現場の先生の実践報告、所員の研究発表などに、メモを取ったり、質問をしたりして研修意欲旺盛な受講風景であった。特に、演習室を使つてのグループ研究・指導案作りなどは、小人数だけに、自由に意見を出し合つて、活発に、時間を忘れるまで協議がつづいていたし、LL教室やアナライザーの設置された教育器機室の真新しい器材を使つての講座は先生方の関心が深く、熱心にかつまた、楽しい講座が展開していた。

また、教育資料(図書館教育)・教育経営・教育相談などの講座は、学校現場での悩みや課題を多くかかえているため、講義においても、研究協議においても真剣に質疑応答がなされ、休憩時間のロビーや夜の自主研修時間の宿泊棟などでも、お互いに熱心に意見交換がなされていた。



受講者のアンケートから

受講者全員からアンケートをお願いしたが、研修講座に対する先生方の要望は実に多様であった。その主なものを要約すると、大体次のようなものである。

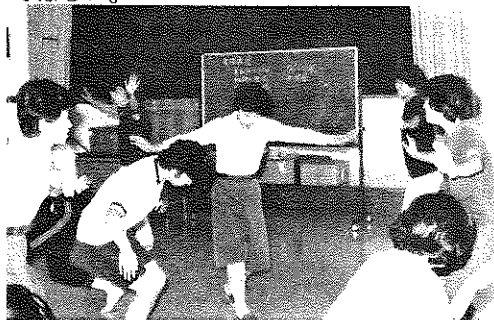
◎ 講座内容について

- (1) 盛りたくさんの内容を含む講座で、何だか「かけ足」で講座が進んでいった感じがした。もっと余裕を持って、「質疑応答」「意見交換」等の時間をとってほしい。
- (2) 明日からの授業に直接に役に立つような現場の先生方の実践報告を多くして、大学教授の講義は、日本的に著名な講師にしてほしい。

(3) TP作成の実習、実技、ヒアリング、スピーキング、アイデア集作り等の演習、指導案作り等を講座に組んだ研修は役に立った。

◎ 時期・日数について

- (1) 授業日の研修は「生徒が気がかりで出にくい」から夏休み中にしてほしい。定期考査、中体連、高体連、給料日は避けてほしい。
- (2) 開始時刻を早めて、終了時刻を遅くして2日間にしてほしい。英語以外にも断続研修をしてほしい。



◎ 宿泊について

宿泊は意味がないという反面、宿泊した人は、交流ができた、ミーティングがためになった、日頃の教育上の悩みが話し合えてよかったという意見が多かった。

昭和55年度の講座について

昭和55年度の研修講座には、本県の実教現状及び課題・アンケート結果等を十分に考慮し、研修内容の質的向上を図って計画が立てられたが、その改善された主な方法・内容は次の点である。

- (1) 受講し易いように、2日講座を増やし、3日連続の場合は夏休みに集中して実施するようにした。また、平常授業日の3日以上講座は1日と2日、2日と2日のように分けて実施するようにした。
- (2) 講座内容が具体的にわかるように、参加申し込みの受け付け前に「実施要項」を配布するようにした。
- (3) 学校行事等の見とおしをつけたうえで参加申し込みができるように、募集の時期を四期に分けて募集するようにした。
- (4) 54年度は60講座であったが、教科関係で11講座増、教育経営で9講座増、教育資料は増減なし、教育相談は1講座減で、計79講座実施するようにした。従って、講座日数も40日増、受講定員も369名増とした。
- (5) 特色ある講座として、症例別の教育相談講座を新設した。また、「教育相談継続研修講座」を24日間、英語の「音声聴解研修講座」を「英語LL演習講座」と名称を改めて9日間実施するようにした。

## 教育相談——現状と課題——

昭和49年2月に開設した旧教育研究所の教育相談は、新教育センターに引き継がれた。名称は「指導相談」と改称され相談事業を継続して来たのである。

佐賀市の中心から、当地川上に移って来て、心配されたことは、交通の不便さから相談数が減少するのではないかということであった。事実、そのことは県議会でも取り上げられたのであるが、一年経過してみても、杞憂であったことは表の通りである。

文字通り、指導相談係の全機能フル回転の一年間であった。

当センター相談事業は、他県に比べて未だ六年を経たばかりであるが、その特色をまとめると、

- (1) 教育相談・生徒指導・特殊教育が連携して総合的な視野からの診断・治療の効果をあげている。
- (2) 児童精神科医・内科医・心理学者を顧問として定期的に事例研究を行い、万全を期している。
- (3) 他機関からの兼任相談員制度により、問題の多様性に十分対処できるように態勢をつくっている。
- (4) 研修・研究の一環として活動している。
- (5) 当該児童・生徒の問題の理解と指導について、在籍する学校(園)の関係教師と研究協

昭和54年度校種別、問題別、相談数

|           | 就学<br>前 | 小学<br>校 | 中学<br>校 | 高<br>校 | 計    |
|-----------|---------|---------|---------|--------|------|
| 神 経 症     | 1       | 11      | 5       | 12     | 29   |
| 習 癖       |         | 9       |         |        | 9    |
| 心 身 症     |         |         |         |        |      |
| 学 業       |         | 4       |         |        | 4    |
| 登 校 拒 否   | 7       | 88      | 161     | 211    | 467  |
| 緘 黙 孤 立   | 1       | 18      | 2       |        | 21   |
| 自 閉 ・ 異 常 | 185     | 218     | 16      |        | 419  |
| 非 行       |         | 4       | 31      | 53     | 88   |
| 進 路       |         |         |         |        |      |
| そ の 他     | 1       |         |         |        | 1    |
| 計         | 195     | 352     | 215     | 276    | 1038 |

※ 電話相談 498件 (2月末現在)

と、登校拒否が断然多く、全体の44% 自閉傾向40%、非行8%、神経症2%の割合になっている。

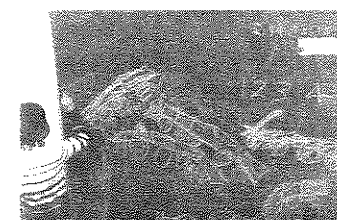
登校拒否を扱う中で、気づくことは、「怠学」との誤認による学校や家庭等の指導が目立っていることである。そのためにいたずらに長引き、神経症の反応・心身症状、家庭内暴力を増幅させているケースが多いことである。また高校の場合の休学の手続きの問題、中学校三年生の場合の卒業の認定と受験の問題等も、治療効果に微妙に影響

するのである。現在、約25%が登校を開始し、休学あけや進級を契機に登校することが見込まれるものが、多数でてきたが、治療効果の大きな要因は、症児への「受容と共感」であり、家族の変容である。特に父親と母親の家庭内での役割分担が、「らしさ」を確立する中で、明確になることが大切である。

つまり症児にとって「心の拠り所」を獲得することと、「アイデンティティ」を得ることである。そこから症児は「自我の確立」を始めるのである。このことは、親のグループカウンセリングを継続する中で明確化されたことである。

さらにこの時期の教師の接し方と学級(ホームルーム)の受け入れ方も重要な要因となる。

非行の場合も、上記のことは類似しているが、高校の場合の処分の仕方と事後指導に「教育相談的配慮が行われたか、どうか」また、当センターと密接に連携できたかどうかが問題になる。



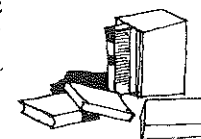
三年間 プレイセラピーと普通児の保育園教育(1年10か月間)により好転してきた、言葉がなかった自閉症児Yちゃん。(5才)

自閉傾向、異常傾向児について問題となるのは就学問題である。重度で精薄との重複の症児の場合は明白だが、それ以外のケースでの、特殊学級か、養護学校か、普通学級かは、ケース、バイ、ケースで、症児に即して、受け入れ側の条件(教師の熱意と力量、施設設備)を考慮しながら慎重に判別することが大切であろう。

求談中のケース(グループ治療も含めて)の中で、健常児の中で保育や教育をした結果好転が著しいケースや、精薄児の学級で好転して来たケースなど、いわゆる交流学習で効果があがったケース等が多いが、それを見ると一層、上述の感を深くするのである。

我々が当面している課題は、前述の諸問題にどうアプローチするかということであろう。また、実務上では、研修・研究・所内諸会議や諸行事、これらに伴う多くの事務処理と相談の受理・継続やケースについてのカンファレンスの日程、また文献研究の時間をどう調和させるかということである。(電話相談も含めて)

現在、我々は長研生や断続研修生を受け入れ、養成的色彩の講座の充実、二か年継続研究テーマ「問題行動の要因分析と指導法の実践研究」の進捗状況の点検、ケースの継続・中断・終結についてのフォローアップと整理に忙殺される毎日である。



# 昭和54年度 新装の教育センター研究紀要

昭和54年4月1日、27年間親しまれてきた教育研究所が幕を閉じ、教員研修の中核的機関として教育センターが発足しました。

教育研究所が残した数々の遺産の一つに研究紀要があります。号数にして、115号を数えています。研究の内容や水準の面でも高い評価をいただいていたものです。

教育センターは、これをなお一層、充実、発展させていきたいと考えて、ここに新しい装幀で「教育センターの研究紀要」を発刊することにしました。

## ○ みんなの先生方に読まれ、 活用される研究紀要を

教育センターは、新しく出発する研究紀要の発刊に当たって、特に「学校や教師に読まれ、活用される研究紀要にする」ことをモットーに、次の点に努力、改善を傾注しました。

1. 学校における教育指導上の課題の解明に直接かつ有効に役立つよう、本県の実情と関連を深める。
2. 学校での活用を促進するため、研究調査内容の一層の充実、改善に努める。
3. 活用の促進を図るためには装幀や配布のあり方等についても検討を加え改善を図る。

## ○ 本県の実情の解明を

上述の1,2の点については、特に本県の第1の教育課題である基礎学力の向上との関連を重視し、学習指導上のつまずきを取り上げております。

また、今日県下の学校が当面の共通の課題としている新しい学習指導要領の実践上の課題にも手をつけ学校での教育指導の拠りどころを提供することに努めました。

## ○ 分冊（すぐ一読）と 合冊（いつでも読める）を

このような内容面での充実、もちろんのことですが、学校での活用を促進するために、形式や運用の面についても改善を加えることにしました。形式面では、研究を校種ごとにとまとめ、分冊に

しました。

従来、学校では、とくすると研究紀要がそれぞれの教科・領域等の教師の占有物となり死蔵されるという例も一部にはみられたように思われます。校内研究等で、いざ必要となった時には行方知れずとなって、せっかくの機会に研究紀要が使ってもらえないうらみを残したのです。

研究紀要が学校に着いたら「すぐ一読」してもらいたい。と同時に、必要な時に「いつでも読める」、そのようにしても使っていただきたいのです。

このためにはできるだけ数多くの教師にそれぞれ研究紀要をお渡しすることが必要です。と同時にまた、図書館などに保存できるように、まとまった形のものを作成、配布することがよいことではないかと考えられます。

こうして、本年度は、各学校には合冊ものと分冊もの（ぬき刷り）の両方を配布することにしました。従って、分冊ものは各担当教師に配布され、「すぐ一読を」、合冊ものは「必要なとき読める」ように図書館へ、というように取り扱っていただきたいと考えています。

## ○ 研究成果に関する環流を

教育センターの研究調査は、今後なお一層、学校との連携を深めて、その課題の解明に役立つものとならなければなりません。そのためには、研究調査の成果が研究紀要と限らず、さまざまな方法やルートを通して、学校や教師に知られるものとなるのが大切です。そして、それに関する学校や教師の批判、修正、追試等の「声」が教育センターに環流することが望まれるのです。

って表現力を高めることが可能になるという立場から、具体的授業を通して、関連のあり方を求めた。

コミュニケーションによる授業分析の研究

（佐賀県教育センター 日高 和之 他4名）

教師と子どもの間のコミュニケーションをフラ

ンダースの授業分析システムによって分析すれば、授業のパターンが量的に把握できる。また、算数授業の分析結果を集計しパターン化することによって、授業改善のめやすにしようと考えた。その結果、仮説通りの分析が可能であったし、授業改善に役立てることができた。

小学校における道徳的実践力を培う方策に関する研究

（佐賀県教育センター 吉木 靖範 他4名）

道徳的実践力を育成するための道徳の時間の指導のあり方を求めるため、①主資料に十分時間をかけて道徳的価値の内面化を図る。②展開の後半から終末にかけて、学年に応じて、ていねいに価値の一般化を図る。という二つの仮説をたて、実践をとおして考察した。

ビデオ教材の制作とその活用に関する研究

（佐賀県教育センター 泉 建一 他5名）

子どもの学習を促進させるためには、授業過程において、映像と言語が調和的に組織される必要がある。本研究では、映像と言語に関して理論研究を進めるとともに、ビデオ教材に関し、「具体の映像化」と「抽象の映像化」の二つの観点から、制作技法と学習効果について実践的追求を試みた。

へき地少人数学級（複式）における学習意欲を高める指導の実践的研究

（佐賀県教育センター 末次 晃 他5名）

へき地児童の抽象的思考能力は都市部児童に比べ、発達が遅れているのではないかとという仮説を連鎖的自由連想法を用いて実証的に究明し、加えてブルーナーの「認識の三段階体験」を支柱とした複式指導過程を児童の学習意欲の高まりを観点として、授業を通して考察した。

読みのたしかさを求める国語科指導法の研究

（佐賀県教育センター 古賀 季彦 他4名）

中心文をさがすには文図をとり入れるとよい。中心文のあり方がわかってくると、文の接続関係が的確に理解できる。そのことが説明文の読みのたしかさにつながる。これらのことを、中学1年生を対象に授業をとおして実証した。

世界地理先習にともなう地理的分野の内容構成とその指導法の研究

（佐賀県教育センター 桜木 末光 他3名）

新指導要領の実施にともなう学習指導法の研究に取り組んだ。①年間指導計画の作成（地理的分野）。②教材内容の精選と重点化、③作業的学習の方法、以上3点を中心にして研究を進めている。2年継続研究を計画し本年度は、指導計画作成に力点を置いた。

計算力の診断・治療に関する手法と実践

（佐賀県教育センター 小副川 重孝 他4名）

既習内容の計算力治療は、①つまずきの診断が

必要。②内容を系統的に配列した学習用テキストが必要。という二つの仮説をたて、県内中学校4校2年生155名に対し診断・治療を実施した。その結果、この手法による指導が比較的短期間に効果をあげうるという目安を得た。

中学校英語における聴解訓練のための教材  
— 英語学習指導の改善をねらって —

（佐賀県教育センター 畠山 孝郎 他4名）

適切な聴解用教材を計画的、継続的に与え、聴きとりのポイントを示し、授業の中で教材に近い場面を与えて指導すれば聴解力は向上する。という仮説をたて研究協力校の2年生の実験授業で仮説を証明するためにその指導過程を探りあわせて聴解用教材を作成した。

文章表現（作文・小論文）の能力を高める指導

（佐賀県教育センター 兵働 文雄 他4名）

文章表現力の実態を調査分析すると、目的内容に応じて書く「文種」に対する知識・書く最初の作業である「取材・構想」の能力が特に欠如していた。そこで、「各文種」に応じた「取材・構想」の方法を一つの技能として身につけさせていく方法を探索した。

学習意欲の向上を目指す高等学校社会科  
地理指導の工夫

（佐賀県教育センター 白川 武人 他3名）

地理、学習における学習意欲の阻害要因を把握するため意識調査を実施し、①学習目的がわからない、②地理Aになじまない、③授業に対して受身の態度であるなどの問題点が明らかとなった。この結果をふまえて、学習意欲高揚のための授業の手法について試案を出した。

高等学校数学科における学習評価に関する  
実態とその問題点

（佐賀県教育センター 山口 圭一 他4名）

評価＝テストという短絡的考え方に対する反省と、授業改善に直結した正しい評価のあり方を探究するねらいで、①教師へのアンケート、②生徒へのアンケート、③学力テスト、④実践授業、などを中心に、県内高校の数学科における評価の実態と問題点を明らかにした。

高等学校英語入門期におけるつまずきの  
分析と授業改造

（佐賀県教育センター 山下一 夫 他4名）

本県では高校1年で英語嫌いになる率が一番高い。入門期の適切な指導法を開発するため、聴解力と作文能力について調査した。いずれも中学1・2年の履習事項も十分理解し運用できないことが判明した。この実態をふまえ中・高の「つなぎ」を意図した指導法を開発する。

「表現」に生きる「理解」指導のあり方

（佐賀県教育センター 栗山 繁治 他4名）

作文の学習計画の中に位置づけられる読みの指導や、作文力に活用することを併せてねらう読みの学習に、もっと書く立場からの教材の開発・活用や指導法の工夫が積極的に試みられることによ

## 昭和54年度

## 長期研修について

昭和54年度に、教育の充実及び教育の振興を図るため、先生方の研修並びに教育に関する専門的技術的事項の研究調査などを行う機関として、佐賀県教育センターが佐賀郡大和町に置かれました。

このセンターは研究、研修、教育相談、教育資料の提供という4つの大きな事業をしています。

その中で研修には大きく分けて、先生方に2、3日当センターに来て、講義を聞いたり、協議、演習等をしていただく短期研修と、6か月あるいは1年間、教育実践上の諸問題について、当センターの施設設備や図書資料を十分活用して専門的な研修をしていただく長期研修とがあるわけです。

昭和54年度は、高校数学と高校英語にそれぞれ1名ずつ1年間長期研修生を迎えることができました。昭和55年度は小・中学校の先生方にも研修していただけるよう計画しています。

「児童・生徒と授業を通して直接接することのでき

ない教師生活なんて味気ない」とよく言われます。確かにその通りだと思います。が、自分が教壇に実際立って出てきた問題や悩みを解決するために深く考えたり、新しい指導法を求めて文献を読んだり、教育技能を高めるためセンターの施設を利用して研修したりするために、一時期、児童・生徒から離れて、今までガムシャラにやってきたことを見直すことも必要ではないでしょうか。

センターは佐賀県のほぼ中央部に位置し、県内いずれの地区からも通勤が可能です。豊かな自然環境に囲まれた、四季おりおりの美しさをながめつつ、時には研究のため文献探しや読書に没頭し、時には教育問題あるいは教育技術について激論を戦わせ、集中的にある技能を訓練修得し、明日の日本の教育を深く考えることのできる機会を与えてくれる長期研修に御応募ください。

## 昭和54年度 長期研修生の研究内容と感想

高等学校 数学 江口喜人

私は農業高校で4年間教鞭をとってきたが、その間、生徒の学力の実態は段々低下する一方であった。そこで、昨年度はそれらに対応するため新入生に関して、2ヵ月ほど数式の計算について中学までの復習を行なった。多少の効果はみられたのであるが、全領域を集中的に復習するのは時間的にも無理である、そこで、毎時の授業を工夫する必要を感じ、教育工学OHPに救いを求めようとして、テーマを設定していった。

まず教育工学OHPについて文献により理解を深めた。そして、教育工学の一つの手法である論理分析を三角関数について行ない、OHPを位置づけた授業を設計していった。そして、実践授業を5時間ほど行なった。実践授業においてあまりいい結果はでていない、この要因はいろいろ考えられるのであるが……。ただ分析していくことによってレディネスの把握、そして生徒の途中での学力の形成の把握の重要性を痛感することができた。これまでのような、つまり授業（自分では確認しているつもり）を反省するとともに、生徒の学力の形成を把握しながらの授業をこれから先、行なっていかなければならないと思っている。

この一年間、貴重な体験ができ、深く感謝しております。この体験を今後の教科指導等に生かしていきたいと思っています。 END

高等学校 英語 松尾千恵子

佐賀県教育センターが発足いたしました初年度の高等学校英語長期研修生として、大変貴重で有意義な一年間の研修の機会と経験を与えて下さいましたことに対して、深く心より感謝致します。

一年間の研修内容は多岐に渡り、教育センター内研修を始めとしたしまして、県内・県外・国外研修に至り、その過程で、いろいろな方々との知遇を得、たくさんの書物に接し、恵まれた環境設備の中で、心の求めるままに勉強を進め、自分なりの研究課題を見つけ、打ち込み、窮めることによって、鳥瞰的に考える心の変容をきたしました。

この月日を私は夢のかけ橋と名付けます。雨が止み、薄日が射し、小鳥が囀り、空には美しい7色の虹。虹は夢と希望と輝きを与え、生命の不思議な感動と生きる喜びを沸き起こします。そのような雨上りの束の間のひととき。教職に就き、3年経つ頃生じた悩み・迷いが、この橋を渡り切る時、淡い虹と一っしょに消えるものと確信します。

短かった一年がすぎ、私の胸に去来いたしますものは、人・本との出会い、学ぶ楽しさ、研究するおもしろさ、語り合える幸、広く大きな視点からの見方・考え方、教育の真の認識などです。

より長期研修の機会が増えることを願いますと共に、多くの先生方からの御指導・御助言等に対して、この紙上より厚く御礼申し上げます。

I 昭和54年度の実践・研究記録を下記の要領で募集した。

## 1. 目的

県内小学校・中学校及び高等学校に在職する教職員からすぐれた教育研究や教育実践を公募し、本県教職員の研究意欲の高揚と教育水準の向上に資するとともに、広く県下に紹介する。

## 2. 主催

佐賀県教育センター

## 3. 応募規定

(1) 応募受付期間  
昭和54年11月19日(月)～12月10日(月)

(2) 応募先  
佐賀教育センター

(3) 応募資格

県内小学校・中学校及び高等学校に在職する教職員とそのグループ

## (4) 応募要領

① 応募者は個人または学校・グループで自由に応募できます。

② 実践・研究記録文のテーマは自由ですが、内容は学校教育に関するものとします。ただし、研究委嘱期間における研究は除きます。

③ 実践・研究記録文は、他の団体等が主催する懸賞募集等に入賞していない内容とします。ただし、県内教育関係団体が主催する事業のものは除きます。

## ④ 送付先

ア 市町村立学校においては、関係市町村教育委員会できりまとめるうえ、佐賀県教育センターへ送付してください。

イ 県立学校においては、直接、佐賀県教育センターへ送付してください。

⑤ 応募原稿は、横書き400字詰原稿用紙(なるべくA5版)を使用し、50枚以内にまとめてください。

⑥ 応募記録文は返却しません。

## 4. 表彰

(1) 表彰は、校種別、部門別(個人の部及び学校、グループの部)に行い、特にすぐれたものに記念品を送ります。

(2) 選考は、学識経験者及び教育センター所員で構成する委員会で行います。

## 5. 発表

(1) 表彰者の発表は、昭和54年度内に、本人あてに通知します。

(2) 表彰記録文は冊子として公表するほか、佐賀教育センターが行う研究発表会で公表します。

## 6. その他

この催しに関する事務は、佐賀県教育センターで行います。

## II 今年度の応募は、下記のとおりであった。

小学校……………12編

中学校……………6編

高等学校……………2編

(含、特殊学校)

計……………20編

※ この20編を部門別にみると、下記のとおりであった。

個人研究……………17編

学校研究……………3編

※ この20編を教科領域等別にみると、下記のとおりであった。

小学校国語……………2編

小学校社会……………2編

小学校算数……………1編

小学校理科……………2編

小学校音楽……………1編

中学校理科……………1編

高等学校数学……………1編

道徳教育……………1編

特別活動……………1編

学校経営……………2編

教育相談……………1編

学校図書館……………1編

特殊教育……………1編

ゆとり……………3編

III 今年度の審査委員会(委員長 杉 茂)は、2月28日に開催され、8人の委員の方々が慎重に審査された結果、下記の5編が入選と決定された。

なお、この入選論文は冊子として公

表するとともに、5月中旬に計画している研究発表会でも紹介される予定である。

＜入選論文＞(順不同)

○ひとりひとりの探究活動を重視する理科学習指導について

脊振村立脊振小学校久保山分校

平川達也先生

○やさしくたくましく(31人の交歓日記)

富士町立北山小学校

緒方真知子先生

○連帯性を培う学級づくり(実践記録)

佐賀市立城西中学校

徳島久義先生

○「数学だいきらい」からの脱出をめざして

私立龍谷高等学校

平山実先生

○粗大運動訓練の研究と実践

県立金立養護学校

(校長 新郷 霞先生)

最後になりましたが、ご応募くださいました多くの先生がたに厚くお礼申し上げますと共に、今後とも、よろしく願ひいたします。

昭和54年度  
教育実践・  
研究記録の紹介

# 教育専門図書館をめざして ― 教育資料室の案内 ―

## はじめに

情報化社会という言葉は、流行語のトップになった感があるが、情報システムがいちばん立後れているのは教育であるというのは、意外ではあるが事実である。1980年代が教育の時代であるといわれ、教育問題が国民的関心事となっている昨今、教育情報の収集と検索のシステム化は最も重要かつ緊急な課題といわなければならない。

佐賀県教育センターでは、以上のような認識にたつて、昨年4月開所以来鋭意教育資料の充実に取りこんできた。その一部をここに紹介して、先生方の積極的な御利用と一層の御協力を心からお願いしたいと思う。

### 1. センター所蔵の図書資料

現在教育資料室に保管している資料は次のようなものである。

- ① 教育専門図書 約3600冊(昭和55年1月現在調べ 以下同じ)
- ② 教育研究冊子ならびに実践報告書類約8600点
- ③ 小学校・中学校・高等学校の各種教科書(教科書センターとして常時展示)
- ④ 教育専門雑誌 約20種



(教育資料室)

このほか昨年県内の小中学校、高等学校の好意によって収集した資料が約1200点ある。この欄を貸りて関係各学校に厚く御礼申し上げるとともに、主だったものを紹介して御活用をお願いしたい。

#### ○ 通知表・生徒手帳

校種別にファイル保管するとともに、代表的なものをガラスケースに展示している。

#### ○ 学校史・開校記念誌

開校百年記念誌、三十年史等県内学校のものはほぼ洩れなく収集し展示している。教育史研究や記念誌の編集、さらには開校記念行事等の企画にも欠かせない資料である。

#### ○ 小中学校・高等学校要覧

学校要覧は毎年度収集し、市町村教育委員会ごとに整理している。学校調査資料として、教育系大学生の利用も見受けられる。

また貴重な歴史的資料として、鈴木三重吉編集

の「赤い鳥」、ならびに「尋常小学 国語読本」等の覆刻本や英文の「マッカーサ司令部発 教育関係指令」等、わが国の教育史上重要な位置を占める歴史的文書も保管展示している。



(故 山中久雄氏寄贈 「赤い鳥」)

### 2. 教育資料室の利用について

#### ① 開室日時

平日 午前9時から午後5時まで  
土曜日 午前9時から12時まで

ただし日曜・祝祭日・年末年始、その他特に定めた日は休室とする。

現在所外への貸出しは行っていないが、資料の複写については、実費で便宜をはかっている。

参考までに54年4月から55年1月までの利用状況を次に記しておく。

(入室者数)

| 利用目的   | 人数    |
|--------|-------|
| 調査研究   | 715   |
| 閲覧     | 657   |
| 参観     | 638   |
| レファレンス | 41    |
| 複写     | 13    |
| 計      | 2068名 |

(利用冊数)

| 種類  | 冊数*   |
|-----|-------|
| 図書  | 372   |
| 紀要  | 204   |
| 雑誌  | 118   |
| 教科書 | 700   |
| 計   | 1394冊 |

#### ② 資料の分類と配架

図書は「日本十進分類表」により分類し、その他の資料(研究紀要・実践報告等)は、全国都道府県指定都市教育研究所長協議会制定の「教育関係資料分類基準」によって分類している。この基準は、学校図書館における教育資料の整理に参考になると思われるので、主類の部分を次に記しておく。

|             |            |
|-------------|------------|
| A 教育一般      | G 教科・領域    |
| B 教育原理・教育思想 | H 初等中等高等教育 |
| C 各国の教育・教育史 | I 特殊教育     |
| D 教育行財政     | J 教育調査・統計  |
| E 学校経営・管理   | K 教育と社会    |
| F 教育内容・教育方法 | L 社会教育     |

### 3. 資料寄贈のお願い

センターでは、先生方の教育活動に役だつ資料の収集に努力しています。各学校、機関における調査研究資料、沿革史、記念誌、広報誌、資料目録、生徒指導資料などを刊行の節は、ぜひ御寄贈下さいますようお願いいたします。